

# 地方国立大学における絶滅危惧研究種を巡る教養教育・専門教育の取組

小助川 貞次  
(富山大学人文学部)

## 0. 本発表で対象とする授業

富山大学・教養教育・言語と文化「ようこそ漢文訓読の新々世界へ」(2007年前期開講、人文学部を除く全学部1年生対象、履修者131名)、専門教育・日本語学特殊講義「東アジア学術交流史としての漢文訓読」(2009年前期開講、人文学部2~4年生対象、履修者100名)、専門教育・日本語学講義「デジタル化時代に対応した漢文訓読研究の社会的共有システムの構築」(2009年後期開講、人文学部2~4年生対象、履修者23名)。

## 1. 絶滅が危惧される漢文訓読研究の現状

漢文訓読が日本以外の漢字文化圏でも行われていたことは、1960年代から知られており、国際共同調査や国際会議も行われている。しかしこのことは専門的な事典を除けば一般社会ではほとんど認識されていない(特に高等学校の「国語総合」の教科書や日本を代表する国語辞典では全く取り上げられていない)。さらに漢文訓読研究に関わる国内最大の学会組織「訓点語学会」の会員数は400名を超えているが、実際に漢文訓読資料を手にとって調査・研究を継続している研究者は極めて少数で、その多くはすでに大学を退職した大家である。高等教育においても漢文訓読をテーマとする授業はほとんど行われていないのが現状であり、このままでは日本国内における漢文訓読研究は遠からずして絶滅する。

## 2. 大学の制度設計と教員意識の問題

富山大学は8学部・3研究科・3教育部・2研究部からなる地方総合大学で、理工系・医学薬学系以外は博士課程を持たず、研究者養成機関ではない。ただし発表者の所属する人文学部・人文科学研究科からは、これまで研究者になった卒業生・修了生は存在し、研究者養成機関でないというのは、むしろ制度設計から来る教員自身の意識の問題である。

## 3. 大学教員は研究者であったはずだ

大学教員は採用に至るまで研究一筋だったことは疑いなく、たとえ肩書きが教育職であっても、どのような小さな大学であっても、研究者という自覚はあったはずである。できるだけ多くの発表の機会を自ら獲得し、自己顕示に努めてきたはずで、逆に応募に際して(特殊な場合を除けば)学生支援・教育改革・授業改善・大学運営を目指していた研究者などはいない。しかし昨今の現状は、研究・教育・管理運営・社会貢献のすべてが業績評価の対象となり、勢い研究から手を引いてしまう教員が多くなったような気がする。

一方で、学生は高い専門性を求めて入学して来ることは間違いなく、研究から手を引いてしまった教員と出会うことは不幸なことである。「大学は研究機関ではなく、高等教育機関だ」「うちの大学はレベルが低いから専門的なことはできない」というのは、歩んできた自らの過去を否定する詭弁でしかない。

#### 4. 絶滅危惧研究種を教養教育と専門教育でどのように扱うのか

心構えと覚悟がここまでできれば、あとは絶滅寸前の研究内容をどのように学生に伝えて行くのか、この一点だけの問題になる。学問を継承できるのは、大学教育の現場以外にはない。教養教育と専門教育の理念や目標はもちろん異なるが、それぞれの学問的到達点は全く同じで、喩えていうならば山頂を目指すのに緩やかなハイキングコースを選ぶか、それとも岩肌あり谷川登りありの険しいコースを選ぶかの違いでしかない、と思う。

##### 〔方策1〕「共有・非公開」の精神

漢文訓読研究がここまで低迷してきたのは、研究資料が一般に入手できないこと、初心者のための教科書が無いこと、高等教育で漢文訓読をテーマとする授業がほとんど行われていないことによる。漢文訓読資料は国宝・重文級のものが多く、実見できるチャンスは大学教員でも限られている。しかもこれらの資料は、墨書本文の上に微細な朱点や墨点を書き加わっているため、精密なカラー写真でないと原本の状態を再現できない。したがってテキスト（資料集）というものもほとんど存在しない。たとえ原本の写真撮影ができて「研究用」という制約のため、一般に公開することはできない。発表者はこの少ないチャンスをできるだけ学生に伝えられるように、面倒な調査手続きから始めて調査の様子を事細かく話し、写真撮影ができた場合は画像を映しながら、撮影できなかった場合は書写したものを提示しながら説明することになっている。こうすることで公開はできないが学生と共有することはできる。従来の研究が閉鎖的だったわけではないが、当時はコンピュータ機器など無かったし、研究成果を学術雑誌や紀要などの紙媒体で発表するのが唯一の公開方法であった。一気に公開を求めずに、まずは資料を共有することが先決である。

##### 〔方策2〕確認カードの使用

講義系の授業ではデジタル画像を使用するとともに、授業内容の確認と質問・回答を兼ねた紙ベースの「確認カード」を使用している。授業終了時にその日の授業のポイントを三点だけ簡潔に記入させている（質問も書かせる）。教員が意図した内容と学生が記入した内容とのズレを見て行けば、どこまで伝わったかが分かる。次回の授業冒頭で、回答と合わせてこのズレについて説明すれば授業理解は一層深まる。すべて手作業なので毎回完璧にはできないが、学生の様子は学部の違いも含めてよく分かる。学術用語についても、完全に統一できている研究分野ではないので、自分の使った用語が学生にどのように伝わったのかを確認することができ、教員自身の研究に資するところも大きい。漢文訓読に対する社会的認識を獲得するには、高等教育でのこの地道な一歩しかない。

##### 〔方策3〕SNSの利用

一方、少人数の演習系では学内専用のSNSを利用している。コミュニティの中で課題の指示・確認・質問への回答、資料の追加提示などを行っている。富山大学のSNSはファイル添付にいくつかの制約があって大量の画像処理には向いていないが、コミュニティ参加者の作業過程を時系列で管理できること、書込内容を全員で共通できることなど、確認カードよりもきめ細かく学生の理解を確認することができ、授業内容の共有システムとして利用価値が高い。先行するコメントを借用・編集して書き込むという悪態も予測されるが、少人数という緊張感がそのような危険性を回避している。